

中世アル・アンダルスにおけるユダヤ系住民の 社会的地位について

上 間 篤

On the Social Status of the Jews in Al-Andalus

Atsushi Uema

要 約

本小論は、アブデラマン三世（911年～961年）の寵臣《ハスダイ・イブン・サプル》の幾多の卓越した功績と業績をふまえて、中世スペインのイスラム教徒社会におけるユダヤ系住民の社会的地位について考察し、当時としては超人的とも言えるハスダイの働きも究極的にはアラブ支配体制の障壁を突き崩すまでには至らなかった内実を考える。

Abstract

This short paper examines the social status of the Jews in Al-Andalus through the life of a distinguished Jew named Hasday Ibn Saprut, who served in numerous outstanding ways in the court of Abderraman III (911-961). By observing various aspects of Hasday's major contributions and achievements, the paper has tried to reveal what the Jews of the time could do and what they couldn't in Al-Andalus due to their ethnic background.

はじめに

アラブ・ベルベル軍は力でスペイン人を抑えつけるのではなく、シリアやイランなど東方の諸地域の征服と同様、周辺の田園部を含む都市や砦、有力貴族を単位とした各個に条約（スルフ）を結び、人口に応じた一括貢納を条件に、住民の生命、財産、身分の自由（奴隷化しない）、信仰を保証し、事実上の自治を与えた。征服の進行中は、アラブの敵を助けないことも重要な条件であった。

また『集史』によると、トレードだけではなく、コルドバ、セビーリヤなど主要都市で、ユダヤ教徒は積極的にアラブに協力し、信用を得て、アラブ軍が去ったあと、少数の駐留軍とともに警備を任されたという。ユダヤ教徒に対する厚遇のため、マグリブをはじめ、地中海全域から、非常に多くのユダヤ教徒がアンダルスに移住し、さながらアンダルスは

かれらのパラダイスのような観を見せるようになった。のち、ユダヤ教徒はアラブ・イスラム文化の強い影響のもとで、聖書解釈、ヘブライ語学、ヘブライ語の詩、哲学、自然科学などの研究をさかんにに行い、アラビア語やヘブライ語で表現するようになる。¹

上述の引用は余部福三が自著の『アラブとしてのスペイン』の中で述べているくだりである。その歴史的背景は、約3世紀の間（410年～711年）バスク地方を除くイベリア半島全域を軍事的に掌握してこの地域に歴史上はじめて統一王朝を築いた西ゴート王朝末期の内政事情と深く関係する。この王朝の下ではユダヤ系住民は久しく非差別民族として扱われた経緯があり、引用のくだりは711年のイスラム教徒のイベリア半島への進攻に際して、彼らが民族としてどのように振る舞い、そして彼らがどのような心境で東方からの進攻勢力を迎え入れたのかについて端的に述べている。当時イベリア半島への新興イスラム教徒の進出はかの地のユダヤ系住民にとっては朗報であった。そのことは

様々な研究が明らかにするところである。周知の通り、アラブ民族とユダヤ民族には地誌も歴史も宗教も共有する部分が多い。それにもかかわらず両者を取り巻く現実には平穏なものばかりではない。昨今は両者のいさかいや不協和音がことのほか目立つ現状である。このような現実を見据えながら、本論ではアブデラマン三世の宮廷で医療、政治、外交、学術、教育の分野で並々ならぬ偉才・多彩ぶりを発揮してユダヤ民族の誇りを具現したハスダイ・イブン・サプル（彼がキリスト教徒の王に肥満の治療を施したことは有名で、著者は『名桜大学紀要』（1997年、10月発刊）の投稿論文、「ロマンセ アベナーマルと中世スペイン社会」、の中でその事に言及しておいた）の様々な業績をひもときつつ、アル・アンダルスにおけるユダヤ人の社会進出にかかわる処遇について考える。

I. イベリア半島とユダヤ人

1. ユダヤ人蔑視の背景

10世紀から12世紀のユダヤ人を扱った著書『コルドバのユダヤ人』（著者：ヘスス・ペラエス・デル・ロサル）に次のような記述が見られる。

Los judíos españoles medievales forjaron leyendas diversas asegurando que sus familias se habían asentado en la península siglos antes de Cristo, con la intención probablemente no sólo de darse lustre genealógico, sino de exonerar a sus antepasados de todo consorcio con los asesinos de Jesús, el Mesías cristiano.²

紹介した記述内容は、不名誉なキリスト殺しの罪をめぐる、中世の西洋社会とユダヤ人との関係に言及したくだりである。それによると、キリスト教徒から突き付けられたやっかいな「キリスト殺しの罪」を払いのけなければならぬ深刻な現実を直面したイベリアのユダヤ人社会は、その方策として半島に居住するユダヤ民族に限定する独自の民族史観を形成する必要性に迫られた。このような宗教をめぐる社会背景のもとでイベリアのユダヤ人社会は、保身の術として、彼らの半島での居住の歴史をキリスト生誕のはるか数世紀にまで溯って語る種々の逸話や伝説を生み出して行った。それらの作品を媒体にして彼らは「キリスト殺し」の汚名を返上することに努めた。中世のユダヤ民族にとって、キリスト教徒にはびこった「キリストの死」をめぐるこのような信仰感情の実態は、ほとんどやっかいでいたたまれないものであったろう。この問題をローマ・カトリック教会草創期の出来事と照らし合わせて考えたとき、イベリア半島ではこの種の信仰感情を発端とする諸問題が一層深刻の度合いを深めていた

のではないかと考えられる。身に覚えのない「キリスト殺し」の罪を突き付けられたユダヤ人はやるせなさとはがゆさが複雑に交錯するジレンマの渦中に突き落とされたのである。他方この問題はユダヤ人の民族としての生存権を根底から揺るがしかねない様相を帯びていただけに、彼らが内面的に経験した心の葛藤や恐怖心や強迫観念などは異民族には理解しがたい一面がある。付言すれば、古代のイベリア半島とユダヤ民族の交渉史については、かつて『旧約聖書』の「列王記」、9章26節、「イザヤ書」、23章1節、その他『新約聖書』の「ローマ人への手紙」、15章22節、の記述などがユダヤ民族とイベリア半島の関係に言及するものだと見なされたが、今日の一般的な認識では旧約聖書の記述内容は問題の絡みでは排斥される。ヘスス・ペラエス・デル・ロサルの研究によると、ユダヤ人の居住に関してスペインに残る最古の立証可能な物的証拠はメリダ(Mérida)に保存された紀元後2世紀頃の墓碑銘に確認されるとするが、³ しかしそれとても墓碑に記載された人物がキリスト生誕以前からイベリア社会の一員であったユダヤ人の子孫なのか、あるいはキリストの死後に中東からイベリアに到着したユダヤ人の子孫なのかは特定できないという。

2. ローマ・カトリック教会の成立とイスパノ・ローマ人

キリスト教の西ヨーロッパ地域への布教の拡大とその影響力はローマ・カトリック教会の組織的發展と表裏一体の関係にある。とりわけローマ・カトリック教会の草創期の重要な節目では、ローマ帝国の属州に組み入れられた後にイベリア半島に開花した豊饒な文明が世に送り出した幾多の教養人や宗教者が教会の組織化と神学の発展に多に貢献した。この件に関して筆頭に上げられるのがオシオ(Osio, 257年?~357年)であろう。この人物についてフランシスコ・ウガルテは次のように述べる。

西暦323年には、コンスタンチヌス帝が福音に帰依し、それによってキリスト教がローマ帝国の異教に勝利することとなった。皇帝を歴史に残る改心と決断に導いたのはコルドバの司教オシオであった。中略。オシオはかつてローマの異教権力から拷問を受けた経歴を持つ。彼は西暦4世紀の聖職者の中では最も卓越した人物であり、ローマ帝国をくまなく行脚して福音を述べ伝えたことで知られる。やがてその名声は帝国の権力中枢部に及び、コンスタンチヌス帝の宮廷に召されて皇帝の聴罪師と助言役を拝命する。彼はまたキ

リスト教精神を反映させた弱者救済と奴隷解放をうながす帝国ローマ法典の成立に尽力を注いだ一人でもある。彼の数ある業績の中で歴史的に最も意義深い出来事は彼がニケアで開催された宗教者会議の議長を務めたことである。当時『新約聖書』の解釈には様々な議論や疑問が投げかけられた。聖書解釈をめぐるこのような状況を背景に出現したのがアリウス派のキリスト教である。この宗派の開祖はアレハンドリアの司祭アリオである。この一派はキリストを単なる予言者の一人と見なし、キリストの神性を否定した。新約聖書の解釈をめぐるさまざまな議論と疑問の渦中であって当時の信徒の心は揺れ動いた。アリウス派の説くキリスト教はローマ帝国翼下のゲルマン系種族に広く浸透した。新約聖書の解釈をめぐるこの様な危機的状況を克服するためにコンスタンチヌス帝は325年に小アジアのニケアで公会議を開催することを呼びかけた。公会議での決定事項は後のキリスト教会の歴史に最も重要な意味を持つ。

会議を指揮したオシオは出席者のアリオと白熱した大論議を交わした末に三位一体説を擁護する聖書解釈に勝利をもたらした。後にアリオはローマ帝国の辺境に蟄居を命じられる。中略。しかしながらアリウス派の信仰はその後も頑強に継承され、西暦7世紀までその余命を保ち続ける。テオドシウス帝 [イベリア半島セゴビア出身、ローマ皇帝在位(379年~395年)]の治世380年にはふたたびアリウス派キリスト教を異端宗派と見なす帝国の公式見解が発令された。16世紀にスペインのカルロス5世がプロテスタントの宗教改革運動に対抗してキリスト教徒の結束をうながした信仰態度などはこのようなローマ・カトリック教会の歴史的流れに沿う宗教的立場を反映する。⁴

スペインの視点から教会史の内なる歩みを考えるフランシスコ・ウガルテの論述の骨子は草創期のローマ・カトリック教会の組織的発展に貢献したイベリア半島の精神文化の重要性を力説する。イベリア半島は西ローマ帝国崩壊後も宗教界の舵取役として重要な任務を遂行することになる。その遠因は西ゴート族の西進にある。なぜならばそれによって三位一体説を唱えるカトリック教会と異端の印を押されたアリウス派のキリスト教がイベリア半島を軸にして対立の構図を深めることになるからである。410年に東ローマ帝国の国政を無視して西ゴート族の主要部隊を率いて帝国の首

都ローマの権威を失墜させたアラリックは、後に民族を率いて西進し、ガリアのアキタニアで独立王朝を建てる。やがて北方のフランク族の勢力に屈した彼らは南へ敗走し、主力部隊がイベリア半島に到着する。イベリアへの進出を果たした彼らはしばらく東北部で移動を繰り返すが、6世紀の中頃に至ってトレドに都を定めて王朝を樹立する。この西ゴート王朝の成立はイベリア半島史に歴史上初の統一王朝として名を残すもので、半島史に新たな歴史の幕開けを告げるものとなる。宗教の側面においては半島における彼らの存在はかつてオシオが解決したはずの宗教問題の再燃を意味した。なぜならば西ゴート族は民族をあげてアリウス派の信奉者であったからである。彼らが早くにキリスト教に帰依したのはウルフィラと称する人物の働きによる。彼は民族的には西ゴート族の出身で、4世紀に聖書をギリシャ語からゴート語に訳した人物として知られている。イベリアに進出した西ゴート族は、圧倒的に文化的優位を誇る半島のローマ文化に融合を余儀なくされ、ほどなくして民族の言葉を喪失したといわれる。しかし宗教の問題は容易には解決されず、カトリック教会との融和に至るまでは一連の王朝内での血なまぐさい争いを経なければならなかった。この経緯について著者は「中世スペインにおける抒情詩と叙事詩に関する一考察」のなかで次のように言及した。

西ゴート族が民族の言語を喪失したように、アリウス派のキリスト教もやがてはローマ・カトリック教会にその地位を譲り渡す時が来る。507年にトレドに都が築かれてから約80年後の586年のことである。しかしそれは父と子の間で争われた陰惨極まりない権力闘争を経て成し遂げられた改宗劇であった。西ゴート王、レオビヒルド(在位568年~586年)、はアリウス派の宗教の下で国内をより堅固に統一するために半島南部でカトリック教会と同盟を結んでいたビスサンチン系のイスパノ・ローマ人の居住地域に軍事侵攻を行った。王の第一王子であったエルメネヒルドは妻やセビリヤのカトリック大司教聖レアンドロ(西ゴート時代第一級の博学者で『言葉の語源』を著した聖イシドローの実弟)の勧めによりカトリックに改宗し、南部のカトリック教徒が一斉蜂起したときには抵抗軍の総指揮官として父親(レオビヒルド)の軍事侵攻に対峙した。中略。最後にはエルメネヒルドが逮捕されるにおよんで終結を迎える。後に彼は地中海に臨むタラゴナに蟄居を命じられ、その地でゴート王朝の政争劇の犠牲にされて抹殺された。中略。586年にレオビヒルド王が世

を去ると、二番目の王子レカレードが王位を継承する。彼もカトリックへの改宗者であったが、自分の王位継承が確定するまではそのことを隠して周知に事を進め、王位を継承するや否や自分がカトリック教徒であることを公然と表明するにいたる。⁵

西ゴート王朝の特徴の一つに民族的排他主義がある。強大なローマ帝国の秩序が崩壊して西ヨーロッパが新たな世界秩序に向かいつつあった5世紀から6世紀にあっては、民族の生存権をかけた民族主義の台頭は不可避的な時代の潮流であった。俗ラテン語から派生したロマンス諸語の出現もこのような時代の流れに呼応する。近年ソビエト連邦崩壊後に噴出した民族問題にも類似の現象が見て取れる。ただし西ゴート王朝の出現がこのような時代背景を背負っていたにせよ、西ゴート族の「血の純潔」を重んじた態度には宗教も絡んだ強い血族意識に根差した民族的排他主義が潜む。その一例が王朝内でのユダヤ人排斥政策である。西ゴート王朝の宮廷ではユダヤ系住民が役職に登用されることはなかった。王朝初期には西ゴート族と先住のイスパノ・ローマ系市民との婚姻も法律で禁止され、その廃止には「ゴート法典」— [654年に発布され、ローマ法典(成文法)とゲルマンの慣習法(非成文法)が融合して成立した法典(*Lex Visigothorum*): スペインの歴代の法体系の原典]—の出現を待たなければならなかった。イベリア出身者でオシオに次ぐキリスト教界の重鎮はパウロ・オロシオ(390年?~418年?)であろう。彼はタラゴナ(西ゴート王子エルメネヒルドが蟄居を命じられた町。その植民都市としての起源は古く、かつてはイベリア半島の領有をめぐってローマ軍とハンニバル率いるカルタゴ軍との軍事衝突の原因にもなった。)のイスパノ・ローマ人の家系に生まれた。彼は西ローマ帝国の崩壊劇を身をもって体験した歴史家そして神学者の一人で、同時代の先輩格、聖アグスチヌス(356年~430年)に直接教えを請い、歴史や神学の学問を修めた。彼が著した『異教徒に対抗する歴史』は教会を擁護する思想や歴史観を展開させたもので、彼の教護論は数世紀に渡り中世ヨーロッパの精神活動に多大な影響を与えたと言われる。オロシオの行動と功績についてフランシスコ・ウガルテは次のように述べる。

聖アグスチヌスがローマの崩壊劇に歴史的解釈を与えるために著した『神の国』をカルタゴ(北アフリカ沿岸)近郊のヒポナで執筆していた頃、イベリア半島に到来したスエヴィ族(ゲルマン系)やアラノ族(イラン系)の迫害を逃れて若い司祭オロシオがヒポナを訪

れた。訪問の目的は帝国崩壊の意味について聖人に教えを請い、聖人と意見を交わすためであった。偉大な師は若い学僧オロシオに普遍的な歴史について書くことを勧める。師の助言に従いオロシオは全7巻に及ぶ歴史書『異教徒に対抗する歴史』(*Historia contra paganos*)を書き上げる。オロシオの著書はその後数世紀に渡り中世ヨーロッパの思想や歴史の解釈に不可欠な書物として扱われた。9世紀には英国のアルフレッド王[在位(848年~899年):彼は侵略者デーン人から英語を守り、学問を奨励し、オックスフォード大学を創設した、などの功績により大王と称される]がオロシオの著書を英語に翻訳し、また(『神曲』の著者)ダンテもオロシオを称賛した。⁶

賢人オシオとオロシオが活躍した時代はいずれの場合もスペインにおける西ゴート族の統一王朝の誕生よりも年代的には古い。そのことは、今日の南欧の人々の心の深層に宿る宗教的心情がローマ帝国衰退期に台頭した民族主義と深い精神的な絆で結ばれていることを物語る。またスペインでは西ゴート族の「血の純潔」を尊ぶ民族主義が表向きは宗教と結び付いてより強力な政治権力に成長して行った経緯がある。32代続いた西ゴート王朝はその約三分の一にあたる10人の王が権力をめぐる政争で暗殺されたという。それは西ゴート王朝の王権が世襲制ではなく選挙による集団指導体制の中で維持されていたのが原因とされる。この政治体制はやがて王朝の弱体化を招き、711年のイスラム勢力のイベリアへの進出を許すことになる。西ゴート王朝内で市民としての地位を剥奪されていたユダヤ系住民は民族の安寧と他民族との共存を願い、新興イスラム勢力との良縁を望んで暗躍したと伝えられる。西ゴート王朝末期のユダヤ人社会の動向に関して筆者はかつて紀要論文「中世スペインの抒情詩と叙事詩に関する一考察」の中で指摘した。⁷

II. ハスダイ・イブン・サプルについて

1. 生い立ちと青年期

ハスダイ・イブン・サプルの幼少期と青年期についてヘスス・ペラエス・デル・ロサルはモイセス・イブン・エスラが著した『論評と思い出』を引用して次のように語る。

ハスダイの正式の命名による名称はアブ・ユスフ・ハスダイ・ベン・イシャク・イブン・サプルで、ハエンの生まれである。彼の

父イサク・ベン・エスラ・イブン・サプルは富裕で信心深いユダヤ教徒であった。出身地ハエンのユダヤ教会の創建は彼の数ある業績の一つであるが、ユダヤ法典「トーラ」の学徒や文学に身を捧げる者を庇護した。

息子ハスダイは幼少の頃から優秀な教師のもとで聖典に基づく伝統的な教育を受けて成長した。しかし彼は民族教育を具現する職業にはあまり興味を示さなかった。彼を引きつけたのは語学であった。書き言葉・話し言葉のアラビア語を徹底して学び、ラテン語はキリスト教徒やコルドバのモサラベの僧たちに学び、ロマンス語は日頃の生活の中でその運用を習得した。

数ある学問の中でも医学は彼を最も魅了した。医学の学習には常に意欲的に臨み、医学の基礎学習は東方から取り寄せたアラビアの医学書やギリシャの医学書を用いて行った。

ハスダイは他人と接する術に長けていた。その人当たりのよい知性豊かな性格は他人の信用を得るのに打ってつけであった。彼は自分自身とその未来に確信を抱いていた。⁸

以下においては、上述に述べられたハスダイの資質と職業的知識—語学の才能、医学の知識、人当たりのよい性格、自分自身に対する信頼と自信—を手掛かりにして彼の人生の諸相を考えてみる。

2. 薬理学者ハスダイ

ヘスス・ペラエス・デル・ロサルはハスダイの薬理学者としての功績を次のように述べる。

ほどなくしてハスダイは科学者として名声と権威を自分のものにする。とりわけ薬理学の分野におけるある特殊な発見が彼をたちまち有名にした。発見は「トゥリアッカ」の再生産を可能にするものであった。トゥリアッカは現代のペニシリンに相当する古代の妙薬である。ハスダイは中世に至ってこの妙薬の調合方法を発見する。トゥリアッカは様々な病気の治療に用いられたが、とりわけ有毒動物に噛まれたり刺されたりしたときの解毒剤に用いられた。

トゥリアッカは紀元前1世紀頃からその存在が知られ、ミトリダテス・エウパトル王によって発見されたと伝えられる。後にそれはローマ帝国ネロの侍医アンドロマコ（クレタ島出身）によって効能が高められ、錠剤になった完成品は61の物質を調合したもので

あった。中略。トゥリアッカは紀元2世紀頃にはローマ帝国内で恒常的に生産されていたが、やがてそれが忘れ去られる憂き目を見る。トゥリアッカの成分について中世の医者にはアヘンやとかげの焼き肉、その他に種々の物質をあげている。

ハスダイは長期に渡る研究の末、再度トゥリアッカの調合方法に道を開く発見を成し遂げた。その功績が認められ、彼はアブデラマン三世の宮仕えの侍医団の一人に迎えらる。ハスダイが30歳の頃のことである。⁹

上述の内容はハスダイの宮仕えのいきさつが単なる外交術や縁者びいきによるものではなかったことを知らしめる。ハスダイは科学者としての功績が認められて侍医に抜擢されたのである。そのことは当時アル・アンダルスでは一芸に秀でた者には民族の出自に関係なく相当程度の社会進出が認められたことを物語る。宮仕えの奉職を通してアブデラマン三世と懇親を深めて行ったハスダイは、持ち前の語学力がカリフに認められてカリファットの外交官、通訳官、外交文書の翻訳官などの役職に推挙される。

3. 侍医・翻訳官ハスダイ

アブデラマン三世の宮廷でハスダイは二つの役職を拝命する。宮廷医と関税局長（外国貿易からもたらされる関税収入を扱う部局）がそれであった。仕事からハスダイは日常的にアブデラマン三世に謁見する機会を得る。両者の緊密な主従関係はこのような関係の中から生まれる。やがてハスダイはその卓越した語学力でアブデラマン三世の宮廷で徐々に頭角を現す。当時北方のキリスト教世界との外交交渉ではラテン語の知識を有する人材がアル・アンダルスのカリファットには不可欠であった。この時代の要請にイベリアのイスラム世界の側から応えたのがハスダイであった。彼は、通訳官・翻訳官ときには外交官として、コルドバのカリファットを代表してキリスト教世界との重要な外交交渉に臨んだ。ヘスス・ペラエス・デル・ロサルの記述からそれらに関する事例を二、三ひろってみる。

ハスダイの翻訳業績のなかでディオスコリデス（ローマ帝国に仕えた西暦一世紀のギリシャ人医師）の『薬草書』(De Materia Médica)の翻訳は異彩を放つ。貴重な医学文献の翻訳は次のようになされた。

ビサンチンのコンスタンチヌス七世（在位945年～959年）はエジプトに出現したファティマ朝の勢力拡大に脅威を感じ、当時

ファーティマ朝といがみ合っていたアル・アンダルスのカリファットに友好使節団を送り事の事態に備えた。訪朝使節団の目的はアブデラマン三世と友好条約を交わすことにあった。アブデラマン三世はコンスタンチヌス七世の意向を受け入れ、949年にはキリスト教徒の司祭イサン・ベン・クライブを団長とする使節団をコンスタンチノーブルに派遣した。同年春には東方から新たな訪朝団が出發し、同年11月9日に訪朝団はコルドバに到着した。

訪朝団を迎えてコルドバでは盛大な歓迎式典が行われた。訪朝団を率いたのはビサンチン帝国の条約局局長エステバンであった。アラビア語による資料にはこの訪朝団に関する詳細な報告が極端に欠如しているために、訪朝団を代表してエステバンがアブデラマン三世に口頭で伝えたメッセージの内容については何も明らかでない。またハスダイとこの訪朝団との個人的な接触についてもアラビア語の資料は口を閉ざす。¹⁰

ただしビサンチンの訪朝団からアブデラマン三世に献上された品目については文書資料による検証が可能のようである。それによると、献上品目にはディオスコリデスの『薬草書』のギリシャ語版やオロシオが著した『異教徒に対抗する歴史』などの著作物が含まれていたという。それについてヘスス・ペラエス・デル・ロサルは自著の中でイブン・グゲルの研究をスペイン語に訳して次のように紹介している。

『イスラム暦337年（西暦948年）にアブデラマン三世のもとにコンスタンチノーブルの皇帝から一通の親書と極めて高価な献上品が届けられた。送られて来た品々の中にはギリシャ語で書かれた豪華な挿絵入りのディオスコリデスの『薬草書』とオロシオが著した歴史書が含まれていた。中略。これらの書物には次のようなメッセージが添えられていた：《貴国にこれらの書物を記した言語に堪能な者がおれば幸いである。書物が語る内容は大いなる恵を貴国にもたらすことになる》。しかしながら往時のコルドバにはキリスト教徒にも古代のイオニア語（ギリシャ語の一方言）に精通した者は見当たらず、贈呈されたディオスコリデスの著書はしばらくアブデラマン三世の私的な蔵書を飾るだけのもとなってしまう。その頃アル・アンダルスではバグダッドから取り寄せた同書のアラビア

語版が出回っていた。アブデラマン三世は返礼の親書を送り、当該言語に精通した人材の派遣を皇帝に要請した。それに応えて皇帝は聖職者ニコラスを派遣した。彼はイスラム暦340年（西暦951年）にコルドバに到着した。その頃コルドバでは幾人かの医師団が『薬草書』の研究に余念がなかった。それはバグダッドから取り寄せた『薬草書』のアラビア語版が訳本としては未完成の域をでないものであったためである。医師たちの作業は主に未確認の植物や物質をアラビア語で特定することに注がれた。医師団の中で最も研究意欲に燃えていたのがハスダイ・ベン・サプルであった。ニコラスとハスダイがいち早く親しくなり、互いに人間的な絆を深めあったのは言うまでもない。このようにしてそれまで未確認であった種々の物質が次々にハスダイによって特定され、随時アラビア語に訳されて行った。』¹¹

ヘスス・ペラエス・デル・ロサルの解説によると、ディオスコリデスが著した『薬草書』は古代ギリシャの薬学の集大成で、それには約600種類の薬の原料が記され、挿絵入りで薬草や薬木、油脂や鉱物などが紹介されているという。問題の未完成のアラビア語版であるが、それはギリシャ人の聖職者エステバンがアラビア語に翻訳したもので、その編集者は著名な翻訳者フナイン・イブン・イシャクであるという。¹² 訳本はかなり不完全なものであったらしく、それにはエステバンがアラビア語に翻訳できなかった草木や物質が原文のまま示されていた。その不完全な部分を完璧なアラビア語に仕上げたのがハスダイであった。翻訳作業にはラテン語に造詣の深い彼の知識が幸いしたと伝えられる。ハスダイの業績は文化交流や語学教育という観点から極めて現代性と普遍性に富む。彼の功績を現代の視点で顕彰することは有意義であろう。

4. 外交官ハスダイ

ハスダイは有能な外交官でもあった。北方のキリスト教世界との外交交渉では、ラテン語に精通した彼の英知がことのほか功を奏した模様である。10世紀のコルドバのオメイヤ王朝は北方のキリスト教世界を相手に二つの外交問題の処理を余儀なくされた。その一つは南方のイスラム教徒側に起因した事件、他の一つはイベリア半島の西ゴート系キリスト教国の権力闘争に端を発した事件の処理であった。これらの外交問題の処理にハスダイの手腕が発揮されることとなった。前者と後者の事件の内容を以下に紹介する。

神聖ローマ帝国のオットー一世（936年～

973年)は、帝国翼下のフランスやイタリアの地中海沿岸部の社会不安を一掃するためにコルドバに外交団を派遣することを決意した。この背景にはサラセン人(イスラム教徒)の海賊行為があった。当時同地域の沿岸諸都市は波状的に押し寄せるサラセン人の奪略行為に悩まされていた。オットー一世は外交手段に訴えて蛮行を阻止するためにコルドバに交渉団を派遣した。交渉団に託された外交文書の存在は知られていない。従って交渉団に託された使命の全容を知ることは不可能であるが、オットー一世の外交手段がアブデラマン三世に屈辱感を味わせたのは明らかである。それは対抗処置として即座に派遣された使節団にイスラム世界からキリスト教を非難する文言が託されたことでもわかる。これに対してオットー一世は態度を硬化させるや高飛車に出てコルドバの使節団を数年間人質にする外交手段に出た。その間オットー一世は再びコルドバに交渉団を送りマホメットを侮辱するメッセージを送り付けることを画策した。このような動きが進行する中で、コルドバ政庁は外交ルートを通じてあらかじめメッセージの内容を事前を知るようになる。アブデラマン三世は事態の深刻さに素早く対処することを迫られた。なぜならば聖典コーランの教えでは、マホメットの名を汚す者は回教の名において処刑しなければならず、またそれと知りつつ処刑を怠った者には同じ科が課される習わしであったからである。ここに及んでアブデラマン三世はハスダイを起用し、悲劇の回避に向けて困難な外交交渉に当たらせた。ハスダイに課された差し迫った任務は、第一に神聖ローマ帝国の交渉団に託された文言の内容を正確に把握すること、第二にそれが伝えられる通りの内容であれば予想される事態の深刻さを交渉団に訴えて文言の破棄を促すことにあった。ハスダイは危なげなく任務を完遂し、交渉団の団長を努めたファン・デ・ゴルセと個人的に親交を温めるまでに至った。ファン・デ・ゴルセはオットー一世の承諾を仰ぎ、それがかなえられるや携えて来た献上品だけをアブデラマン三世に進呈して条約の成立に臨んだ。両者は奪略行為を糾弾し、条約を締結した。西暦956年の出来事である。¹³

と言われる。それは一方において言葉に対する深い畏敬の念を育む文化を醸成することとなった。イスラム文化圏での詩文学の発達は一つには回教の教理的な本質と関係していると見なされよう。日本語には「言霊」という言葉が存在する。言葉を霊的な存在と見る古代の思想である。詩の発達にはつとに言葉に畏敬の念をいづくこのような人間の精神が深く関与して来たのである。中世のコルドバでは早くから聖典コーランの読み書きを主体とした初等教育が実施された。人々の識字率が飛躍的に向上したのは言うまでもない。教育や文化活動の推進にあたっては当地における中国伝来の麻布を原料とする紙漉きの技術の貢献も無視できないと佐藤次高は言う。¹⁴ アブデラマン三世が神聖ローマ帝国の交渉団に託された文言にこだわったのは聖典コーランの言葉を言霊としてとらえる敬虔な信仰心に突き動かされた結果と見なされる。また凄惨な事態の回避を望んだ彼の慈悲深い態度には、詩の心を尊び学芸を庇護したカリファット特有の精神的土壌が感じられる。日本の平安朝は犯罪者を極力処刑にしなかったことで歴史上特異な存在であると言う。10世紀に隆盛を極めたカリファットの王侯貴族の文化と平安朝の公家文化は、両者とも学芸の庇護と詩作することを崇高な教養の証しとした点で、類似の文化的土壌を感じさせる。さて考察を本題にもどし、後者の事件に話題を移す。

レオン国の王、サンチョ・エル・クラッソ(クラッソは肥満の意)、はぶよぶよに肥えた男であった。この男の肥満の度合いは深刻で、他人の手を借りずには歩くこともできず、乗馬などはもつての外、さらには理性的な判断すらもままならないほどであった。そんなわけで彼が世間の物笑いのねたにされたのは言うまでもない。ここに及んで取り巻きの貴族たちは謀議を重ね、無能で役立たずの王を排斥することにした。

かつて同じ試みで失敗したことのあるフェルナン・ゴンサレスなる人物が再び事の遂行に乗り出し、レオン人の不平分子をかつぎ上げることに成功する。958年の春の某日、ついに軍隊を後ろ盾にして王を国外へ追放した。王は祖母のトーダと共にナバラのパンブローナへ逃亡した。そのあいだ国の不平分子を扇動した貴族たちは合議を重ね、サンチョの従兄弟にあたる人物をかつぎ出し、この男をオルドーニョ四世の名で王に即位させた。

歴史家の描写に従えば、新たな王はせむし男で、性格は意地汚く、他人にへつらうことしか知らない小心者であった。世間にはわか

宗教や芸術の領域において偶像を廃止し、抽象的な幾何学文様を発達させたのがイスラム文化の特徴である

づくりのこの王をオールド・ニョ・エル・マール（マールは「悪い」の意）のあだ名で呼んだ。この男を王に仕立て上げざるを得なかったのは、王家の血筋には他に男性がいなかったのが原因であった。

肥満王の祖母トーダは、追放の直後から孫の王権の回復に乗り出した。王権を奪取するにはやらねばならないことが二つあった。一つは強力な軍事同盟の確立、二つ目は孫に肥満克服のための適切な治療を施すことのできる医者を探し出すことであった。この二つの目的の達成にはコルドバの支援を仰ぐことが最良の策であると思われた。中略。

この要請は受け入れられ、アブデラマン三世の命によりハスダイがバンブローナへ赴くことになった。目的地でハスダイは依頼者に次の二つの事を伝えた：肥満の治療は最新の医療技術を誇るコルドバで行うのが望ましい；兵力の支援には協力をおしまない。但しその協議はコルドバで行うことを条件とする。カリファットの意向は受け入れられ、肥満王とトーダは従者を従えて、歴史上キリスト教徒の王としては前例のない、コルドバ入京を敢行した。ハスダイは交渉の席で依頼者にカリファットの支援と引き換えに作戦拠点となる10の砦を献上するように提案し、その獲得に成功した。959年、カリファットのイスラム軍はナバラのキリスト教徒と組んでレオン国とカスティリア国を攻め、肥満を克服したサンチョ一世を再び王に蘇らせた。肥満の治療は幾種類もの薬草を用いた食事療法と運動を組み合わせたものであった。ハスダイはあらかじめ肥満王に、肥満克服の第一歩としてナバラからコルドバへは歩いて旅することを勧めた。助言は受け入れられ、実行された模様である。¹⁵

アブデラマン三世はハスダイの偉業を称え、カリファットのユダヤ人社会のナシー（ユダヤ教徒を社会的に統率する地位）に推挙した。ユダヤ社会全般を統率する地位を与えられたハスダイは、広く地中海世界、中東、西南アジアに散在したユダヤ人社会との交流を活発に推進し、世界に点在する同朋の精神的安寧と福祉の向上に努めた。10世紀前半期にイタリア南部で起きたユダヤ教徒迫害事件に関してハスダイがコンスタンチノーブルのビサンチン帝国の公権力に遺憾の意を表明したのはその一例である。後に迫害事件はハスダイの外交努力によって解決に向かうが、時のビサンチン帝レカペノス（在位919年～944年）はキリスト

教徒の宗教的感情に配慮して、自分の名前が表に出ないことを条件に迫害事件の鎮静化を図った。この事件の表向き処理にはハスダイの名前が使われたとされる。¹⁶ ただし注視しなければならないのは、ハスダイの外交努力の結実はその個人的な同胞愛と尽力だけに負うものではない。外交交渉にあたっては、彼が中世の地中海世界で「世界の宝石」と称えられたコルドバ政庁の権勢とアブデラマン三世の威光を後ろ盾としていた、ことを見逃してはならない。

おわりに

ヘスス・ペラエス・デル・ロサルは、作者不詳の伝記を引用して、アブデラマン三世に授けられた名誉称号の由来について次のように語る。

929年、アブデラマン三世は、彼の栄誉を称えるアルナシル・リディン・アラー（アラーの神に勝利をもたらす者の意）の称号を、イブン・ハフスの乱を平定し、キリスト教徒に対する初期の戦いに勝利したときに拝受した。¹⁷

称号の由来が物語るように、アブデラマン三世は類い希な名君として後世に名を残した人物である。10世紀のヨーロッパで繁栄の頂点を極めたコルドバの名声は名君アブデラマン三世の卓越した政治手腕を抜きにしては語れない。コルドバ政庁は幾多の困難を克服してイベリア半島のほぼ全域を軍事的に平定した。平定後のカリファットは当時としては西ヨーロッパ並びに地中海地域における最高の文化水準を誇る王国に成長し、「世界の宝石」と謳われた王国の都コルドバは憧れの都として羨望の眼差しを独占した。カリファットの想像を絶する繁栄はアブデラマン三世の政治手腕に負うものであった。彼はカリファットに居住する諸民族（イスラム教徒＝アラブ・ベルベル人、モサラベ＝イスパノ・ローマ系キリスト教徒、ユダヤ教徒）の共同体を手厚く保護し、それぞれの宗教には寛容な精神で臨み、民族間の障壁を排除することに心をくわいて人心の融和を図った。ハスダイはこのような中世の名君に寵愛され、自分の資質と能力を思う存分に発揮する機会を得たのである。ハスダイの晴れがましい活躍の様子が即座に周辺のユダヤ人共同体に伝えられたのは言うまでもない。やがてあまたの離散地からユダヤ人が続々とカリファットに移住して来るようになった。本論の冒頭で余部福三が「ユダヤ教徒に対する厚遇のため、マグリブをはじめ、地中海全域から、非常に多くのユダヤ教徒がアンダルスに移住し、さながらアンダルスがかれらのパラダイスのような観を見せるよう

になった」と描写しているくだりは、カリファットでハスダイが成し遂げた数々の金字塔的業績を無視して語れるものではない。しかし順風満帆の人生を歩んだかみえるハスダイにも出世が際限なく約束されたわけではなかった。ハスダイがいかに傑出した人物であったにせよ、彼がカリファットの権力機構の頂点に立つ大臣に推挙されることはなかった。他の民族の出身者が大臣の要職に就くことは厳格に戒められ、排除された。アラブ貴族の団結心に亀裂が生じてはならなかったのである。中世的精神の限界を物語る良き事例であろう。

注

1. 余部福三：『アラブとしてのスペイン』23ページ
2. Peláez del Rosal, Jesús. *Los Judíos en Córdoba*. Córdoba: Ediciones El Almendro, 1992, p. 13.
3. Peláez del Rosal, Jesús. *Los Judíos en Córdoba*. Córdoba: Ediciones El Almendro, 1992, p. 15.
4. Ugarte, Francisco. *Panorama de la Civilización Española*. New York: The Odyssey Press, Inc., 1963, págs. 39~40.
5. 上間篤：「中世スペインにおける抒情詩と叙事詩に関する一考察」『名桜大学紀要』、第2号、37ページ
6. Ugarte, Francisco. *Panorama de la Civilización Española*. New York: The Odyssey Press, Inc., 1963, p. 42.
7. 上間篤：「中世スペインにおける抒情詩と叙事詩に関する一考察」『名桜大学紀要』、第2号、42ページ
8. Peláez del Rosal, Jesús. *Los Judíos en Córdoba*. Córdoba: Ediciones El Almendro, 1992, p. 66.
9. Peláez del Rosal, Jesús. *Los Judíos en Córdoba*. Córdoba: Ediciones El Almendro, 1992, págs. 66~67.
10. Peláez del Rosal, Jesús. *Los Judíos en Córdoba*. Córdoba: Ediciones El Almendro, 1992, p. 68.
11. Peláez del Rosal, Jesús. *Los Judíos en Córdoba*. Córdoba: Ediciones El Almendro, 1992, p. 69.
12. Peláez del Rosal, Jesús. *Los Judíos en Córdoba*. Córdoba: Ediciones El Almendro, 1992, p. 70.
13. Peláez del Rosal, Jesús. *Los Judíos en Córdoba*. Córdoba: Ediciones El Almendro, 1992, págs. 70~71.
14. 佐藤次高：『イスラーム世界の興隆』169ページ
15. Peláez del Rosal, Jesús. *Los Judíos en Córdoba*. Córdoba: Ediciones El Almendro, 1992, págs. 71~73.
16. Peláez del Rosal, Jesús. *Los Judíos en Córdoba*. Córdoba: Ediciones El Almendro, 1992, págs. 74~75.
17. Peláez del Rosal, Jesús. *Los Judíos en Córdoba*. Córdoba: Ediciones El Almendro, 1992, p. 65.

参考文献

- 余部福三：『アラブとしてのスペイン』第三書館、1992。
- Cuñat, Daniel. *Al-Andalus Los Omeyas*. Madrid: Anaya, 1991, 1.ª ed.
- Isabel Valera-Angeles Llana, María. *La Expansión del Islam*. Madrid: Anaya, 1992, 2.ª ed.
- 樺山紘一：『ルネサンスと地中海』中央公論社、1996。
- López-Ibor, Marta. *Los Judíos en España*. Madrid: Anaya, 1990, 1.ª ed.
- Luis Martín, José. *La Edad Media en España*. Madrid: Anaya, 1990.
- Mitre Fernández, Emilio. *Iglesia en la Edad Media*. Barcelona: Planeta, 1991, 1.ª ed.
- 小岸 昭：『マラーノの系譜』みすず書房、1994。
- 小岸 昭：『離散するユダヤ人』岩波新書、1997。
- Peláez del Rosal, Jesús. *Los Judíos en Córdoba*. Córdoba: Ediciones El Almendro, 1992, 3.ª ed.
- 佐藤次高：『イスラーム世界の興隆』中央公論社、1997。
- Ugarte, Francisco. *Pnorama de la Civilización Española*. New York: The Odyssey Press, Inc., 1963.
- 上間 篤：「中世スペインにおける抒情詩と叙事詩に関する一考察」『名桜大学紀要』第2号、1996。